妙見宮の絵馬

妙見祭の神馬

神事の際、神には最新・最上の品々が捧げられました。馬が神への捧げものに加えられるようになったのは 5 世紀後半頃からです。馬は元々日本には生息していない動物で、当時とても貴重なものだったからです。

その後次第に馬形（土や木、紙で馬の形につくったもの）で代用されるようになりました。馬形献上の風習が簡素化されて板絵馬献上が広く行われるようになった後も馬形と板絵馬の献上は並行して長い期間行われていました。

その後、馬以外の絵も描かれるようになり、中には大型の絵馬も作られるようになりました。著名な絵師が描いた絵馬も残っています。私たちが神社で奉納するような小形の絵馬が出てきたのは、近世末期からです。

◆「募帰絵詞」（室町時代）は、御神木に絵馬を掛けて祈る人々の様が描かれています。そこには、白馬と黒馬の絵馬が 2 枚一組で下げられており、当時は白馬と黒馬、牡馬と牝馬というように 2 枚を一組として献上していたことがわかります。
※長雨には白馬、旱魃には黒馬を献上したので、2 つあわせて豊作祈願でしょうか？

◆妙見宮（現八代神社）にも江戸時代後期からの絵馬が残っています。神社の正面鳥居から入ってすぐのところが絵馬の掲示場所だったようです。人々の願いが込められた様々な絵馬が飾られた様子は、さながらギャラリーのようだったでしょう。

「社寺境内外区画調　八代郡」
八代神社部分図（明治時代）

現在の八代神社
赤丸で囲んだ部分がかつての絵馬所

「桜に馬図」

甲斐良郷画　松井家のお抱え絵師　文政 12 年(1829) 没

額を飾る銅板の中に松井家の紋である三ツ笹紋があり、松井家から奉納されたことがわかります。松井家の記録中に文政 12 年松井督之が妙見社(八代神社)に絵馬を奉納したとあり、その時の絵馬がこの絵馬であった可能性も考えられます。

「伊勢二見が浦図」

明治 12 年(1879)　　作者不詳

縦 107.0 cm　横 74.7 cm

夫婦岩で知られる伊勢（三重県）の二見が浦が描かれています。絵馬の裏には「伊勢参宮願解」とあり、願いがかなったお礼に伊勢神宮にお参りした記念に奉納されたものと思われます。

「江の島図」

明治 40 年(1907)　　作者不詳

縦 66.5 cm　横 90.2 cm

江の島（神奈川県）を描いたものです。江島神社に祀られている弁財天は、宮島・竹生島と共に日本三弁天の一つです。宮地村の住人が奉納しています。

物語の一場面を描いた絵馬は、現代の私たちが見ると何の話が元になっているのかすぐにはわからないものが多くあります。しかし、当時の人々にとっては一目見て「あ～、あの物語のあの場面ね」とわかるようなよく知られた場面でした。

「桃園三傑図」　明治 17 年(1884)

泉敬徳画　矢野良敬の門人　号響谷
八代高田庁吏

縦 133.7 ㎝　横 190.9 ㎝

中国の「三国志」を題材としたものです。桃の木の下で義兄弟の契りを結んでいる（兄弟の約束をする）のは「三国志」の中の英雄、劉備玄徳、関羽、張飛です。

「張良沓を捧ぐるの図」　文久 2 年(1862)

香竹画
縦 139.1 ㎝　横 197.0 ㎝

張良は、中国漢の高祖の臣下で、高祖の作戦の中枢となる人物でした。若い頃、橋の上で黄石老人に兵法の書を授かった説話★が著名で、能楽でも「張良」として演じられています。

描かれているのは、大蛇を倒して手にした沓を張良が老人に差し出している場面です。

★夢で兵法を授けると約束した老人が、わざと沓を何度も川に落として張良に拾わせ、その心を試す。張良はその度沓を拾って老人に差し出し、最後には大蛇と戦って沓を奪い返した。老人は張良の勇気をたたえ、兵法の秘伝を授けた。

「屋島合戦図(鏑引)」　明治 32 年（1899）

吉井樵友画　杉谷雪樵の門人　八代郡宮原の人
天保 9 年～明治 42 年
（1838～1909）
縦 81.0 cm　横 108.0 cm

〇で囲った部分が鏑（しころ）

平家物語中の話が題材です。

平景清（伯父殺しから悪七兵衛と呼ばれた）が逃げる源氏の三穂屋（水尾谷、三尾谷などとも書く）十郎の鏑を引っ張っている場面を描いています。この後、鏑はちぎれて十郎は逃げていきました。右側の長刀を持っているのが景清で左側の武将が十郎です。八千把村の住人 5 名による奉納。

「源頼義水請いの図 」　明治時代以降カ

作者不詳
縦 63.5 cm　横 85.3 cm

源頼義は、平安時代後期の武将です。

東北で起こった前九年の役の際、兵士たちが水に窮しているのを見て、頼義が日頃から崇敬している石清水八幡を伏し拝み、弓でかたわらの岩を除くと、たちまちそこから水が湧き出たという話が題材となっています。